

## 落 語

### 1. 落語の歴史

#### (1) 御伽衆、曾呂利新佐衛門、安楽庵策伝、「醒睡笑」

今、我々が「落語」と呼ぶものの原型は戦国時代から江戸時代の初めにかけてできたものであると言われている。

戦国大名は見聞を広め無聊を慰めるために学者、茶人、頓智の利く者などを「御伽衆」として抱えていた。

曾呂利新左衛門と安楽庵策伝はともに豊臣秀吉の御伽衆であったと言われている。

安楽庵策伝は浄土宗の僧であり、茶人でもあった。京都所司代板倉重宗に乞われてそれまでに見聞したり自ら口演したネタをまとめたのが8巻に上る「醒睡笑」(1628年)である。この「醒睡笑」には現在でも演じられている「平林」「牛ほめ」「子ほめ」「てれすこ」「寝床」などの原型とおぼしきものが含まれており、策伝をもってして落語の祖とするのは妥当であると思われる。

#### (2) 鹿野武左衛門（江戸）、露の五郎衛門（京都）、米沢彦八（大阪）

五代将軍綱吉の時代（1673年延宝元年から）、江戸、京都、大阪三都においてほぼ同時に「辻話」で人気をとるものが現れた。

鹿野武左衛門は緒家に招かれて座敷話を演じたほか、江戸の中橋広小路などで小屋掛けの辻話も興業。

露の五郎兵衛は京都祇園真葛ヶ原などで聴衆から代金をとって軽口小出を演じた。

米沢彦八は大阪生玉社境内で「当世仕方物真似」の軽口噺を興行して評判をとった。

ところが、1693（元禄6年）江戸で悪疫流行の折、馬が人語を発して「南天の実と梅干を煎じて飲むと効能がある」とお告げがあったというので南天の実と梅干が高騰するという騒動が持ち上がった。

ある浪人と八百屋がたくらんでひと儲けしようとして虚言を流したことがわかり二人は断罪されたが、「馬が喋った」と言うのは武左衛門の著「鹿の巻筆」中の小咄から思いついたと犯人が言ったため、武左衛門もトバッチリを受けて、島流しの刑（6年後赦免されたが過労がたたり間もなく病没）となり、江戸では落語の火が消えたような状態になってしまった。

#### (3) 咄の会

ほぼ100年後の文明・寛政（1781～1801年）年間に狂歌・狂文の盛行とともに江戸に再び落語ブームが巻き起こる。

そのしばらく前から料理屋の二階などを借りて人を寄せ、狂歌や自作の小咄などを披露する会が盛んに行われるようになっていた。

町大工の棟梁を本業としながら狂歌師・戯作者として活躍をした、初代立川馬馬はかねてからそういった会で自作の小咄を自演していたが、天明6年4月（1786年）向島の武蔵屋で初めて落とし噺の会を催して好評を博した。以後この種の会が定例的に開かれるようになった。

焉馬の会に刺激された人たちの中から三遊亭圓生、三笑亭可楽、朝寝坊むらく、立川金馬など落語を本業とする人たちが輩出するのだから初代焉馬を「江戸落語の祖」と言うのは十分うなづけるところ。

櫛屋の職人であった三笑亭可楽が寛政10（1798年）江戸浅草柳稲荷前で初めて寄席興行を催したのが江戸の寄席の始まりであるとされている。

#### （4）三遊亭圓朝言文一致

幕末から明治にかけて活躍した落語家に「落語中興の祖」といわれる三遊亭圓朝（天保元年1839～明治33年1900）がいる。江戸は湯島の生まれ、父は音曲師。

幕末に芝居話で人気を博したが維新後時代のニーズに合わせて素噺に転向し話芸で聞かせる人情話を次々に創作した。今でもよく演じられる「怪談牡丹燈籠」「真景累が淵」「塩原多助一代記」「文七元結」「死神」「お若伊之助」などは皆圓朝の作品です。

圓朝が素噺を多く作るようになったには原因があります。ある寄席で初めてトリを務めることになった時のこと、芝居話で道具を用意していたところ、トリの前に出た師匠がその噺をやってしまった。そこは圓朝の機転で何とかしのいだものの、このことから他に誰もやらない噺を作らなければならないと思い新作を多く手掛けるようになったとのことです。

圓朝の作品は速記本として数多く出版されました。二葉亭四迷の「浮雲」は言文一致の文学として有名ですが、圓朝の速記本を参考にしたと言われています。

#### （5）珍芸四天王

明治も10年を過ぎるころになると、東京にも地方から新しい人が集まってくるようになり、娯楽の中心である寄席も大きく変わっていきました。

江戸の粋を残した洒脱な話芸やじっくり聞かせる人情噺ではなく見た目の奇抜さやてっとり早く面白いものが受けるようになっていきました。

いずれも後から見れば他愛もない芸ともいえないようなものですが、時の風潮として明治14～5年頃をピークに大流行を見ました。

##### イ、鼻の円遊「ステテコ」踊り初代三遊亭円遊

「向う横丁のお稲荷さんへ一銭上げて・・・」という歌をバックに「ステテコ、ステテコ」と囃して踊るなんとも奇妙な寄席芸です。

鼻の円遊と呼ばれていたほどの大きな鼻をちぎっては投げる仕草も爆笑を誘ったと言われております。

尻を端折って半股引を見せて踊ったことから半股引のことを「ステテコ」と呼ぶようになりました。

##### ロ、ラッパの円太郎 四代目橘屋円太郎

円太郎は鉄道馬車の鞞者が持つラッパを吹きながら登場し「御婆さん危ないよ」などと物真似で客席の笑いを誘った。

円太郎の人気で鉄道馬車が「円太郎馬車」と呼ばれるようになった。

##### ハ、へらへの萬橋三遊亭萬橋

赤い手拭いを持って赤のセンスを開いて「へらへらへったら、へらへらへ、太鼓が鳴ったらにぎやかだ、大根煮えたらやわらかだ・・・」と言った他愛もない歌を歌い踊る珍妙な動きで人気を呼んだ。

## 二、釜堀の談志 四代目立川談志

郭巨の釜堀りは「二十四孝」をパロディにした踊り。座布団を丸めて子供に見立て「テケレッツノパー」とか「あじゃらかもくれん」など意味不明の文句を唱えながら高座を歩き回った。

### (6) 禁演落語

昭和16年太平洋戦争直前に講談落語協会は「明烏」「五人廻し」「三枚起請」「品川心中」など廓話や間男の噺53種を「禁演落語」として、浅草・本法寺に「はなし塚」を作って封印しました。これは自主規制であったがそうせざるを得なかった圧力があつたようです。

これらの噺を禁じられては落語家にとっては手も足も出ないような有様でした。柳家小さん、三遊亭円生、古今亭志ん生など持ちネタの豊富な人は何とかしのぐことができたが、桂文楽は持ちネタが少なくしかも艶っぽいものを得意としていただけにかなり困ったのではないかと思われる。

昭和21年9月「はなし塚」の前で禁演落語の復活祭を実施。

### (7) 戦後を彩った落語家たち

三遊亭歌笑 七五調の文句を軽快なリズムで綴る「純情歌集」で一世を風靡した。

昭和25年進駐軍のジープに跳ねられて死去。

柳亭痴楽 純情詩集の形式を引き継いで爆笑を誘った。「破壊された顔の持ち主」をキャッチフレーズに。「東京娘の言うことによ、サノ言うことによ、柳亭痴楽はいい男、鶴田浩二や錦之助、あれよりグリーンといい男、てなこと一度でも言われてみたい、言わせたい」

三遊亭円歌 歌奴を名乗っていた二つ目時代に売れた。「浪曲社長」「月給日」「授業中」の三部作とりわけ「山のアナ、アナ・・・」のフレーズで有名な「授業中」はラジオ、テレビを通じて全国的に大人気になりました。円歌は吃音でしたので吃音と得意の浪曲を活かした新作落語です。

林家三平 七代目林家正蔵の息子。昭和30年代にテレビ番組の司会をしていて言葉に詰まり「三平です、どうもすいません」と言ったところが大うけして一躍時代の寵児になります。寄席ではナンセンスな小咄を連ねた「リズム落語」で客席を爆笑させました。噺の合間に挟んだ「身体だけは大事にしてください」というフレーズもトレードマークになりました。

### (8) 落語団体の推移

明治8年 三代目麗々亭柳橋を頭取に「落語陸連」を結成するが明治20年代になると「柳派」「三遊派」の2大派閥に分かれ、各寄席を半月づつ交代で興行するようになる。

大正6年8月 「柳派」と「三遊派」が合併し「東京寄席演芸株式会社」を創設して、月給制を取り入れる。ところが、同会社に所属していた五代目柳亭左楽が脱退し、四代目春風亭柳枝と「落語睦会」（三遊柳連睦会）を旗揚げする。その後も6年ほど脱

退、復帰、旗揚げ、合併、解散、などが繰り返される。

- 大正12年10月 関東大震災の後に、五代目柳亭左楽が奔走した結果、大同団結して「東京落語協会」を設立する。これが現在の「社団法人落語協会」のルーツである。しかし、翌13年6月には旧睦会が独立し、「東京落語睦会」として復活する。その後も両会派は分裂、解散、設立を繰り返し「落語演芸東西会」「柳三遊研成会」「日本演芸協会」「三語楼協会」「金語楼一座」「東京落語組合」などの団体が生まれたり、消えたりした。
- 昭和5年 六代目春風亭柳橋と柳家金語楼が「日本芸術協会」を創設する。これが現在の「社団法人落語芸術協会」の母体である。
- 昭和15年5月 第2次世界大戦突入を前にして、新興行取締り規則の改正により、演芸界は警視庁統括の下で「講談落語協会」として統一させられ、全ての落語家は否応なくこの協会に所属することになる。
- 昭和20年 終戦後、官主導の「講談落語協会」は解散し、元の「東京落語協会」と「落語芸術協会」に戻る。「東京落語協会」は昭和21年10月四代目柳家小さんが会長に就任して「落語協会」として新発足する。昭和52年「落語協会」「落語芸術協会」は文化庁の認可を受けて「社団法人」となる。
- 昭和53年5月 六代目三遊亭圓生が中心となり、七代目橋家円蔵、三代目古今亭志ん朝、五代目月の家圓鏡らが落語協会から脱退して「三遊協会」を創設するが、直後に圓生直系一門以外の円蔵、志ん朝らは全員落語協会に復帰する。
- 昭和54年 圓生没後、圓窓、圓也、圓丈らが落語協会に復帰したため、「三遊協会」は円楽一門のみとなり、「大日本すみれ会」から「円楽党」と名称を変更して現在にいたっている。
- 昭和57年 立川談志が弟子を引き連れて落語協会を脱退して「立川流」を創設する。

上方落語では、昭和32年三代目林家染丸を中心に18名をもって「上方落語協会」を結成し、平成16年文化庁の認可を受けて社団法人となり今日にいたっている。このように落語家の団体は離散集合を繰り返し、現在では東京の「落語協会」「落語芸術協会」「円楽党」「立川流」、関西の「上方落語協会」という構成になっている。

## 2. 落語の分類

### (1) 古典落語と新作落語

古典落語は主として明治以前に作られ、人口に膾炙しているもので、多くの落語家によって語り継がれているものです。一方、新作落語はその時々時代の背景を織り込んで作られた落語で原則としてその人一人により演じられるものです。

### (2) 滑稽噺、人情噺・・・

滑稽噺	随所で笑いをとる、面白可笑しい噺。「牛ほめ」「饅頭こわい」「替り目」など
人情噺	笑わせるよりむしろ登場人物の内側をリアルに描き聞き手の涙を誘う噺。「芝浜」「文七元結」「子別れ」など
怪談噺	幽霊・お化けなどを扱った噺。主に夏に高座にかけられる。「真景累ヶ淵」「牡丹燈籠」など
廓 噺	(上方では「茶屋噺」)遊郭で繰り広げられる悲喜劇を扱った噺。「明烏」「居残り佐平次」など
長屋噺	長屋の生活ぶりを描いた噺で、長屋の人間を描いたもの(「長屋の花見」「大山詣り」など)と長屋の建物を描いたもの(「お化け長屋」「小言幸兵衛」など)の2類ある。
仕方噺	演者の仕草や動きが鍵となる噺。
前座噺	初心者でも取り組めるように構成された噺。「寿限無」「道具屋」など
お店噺	町人の子がお店に奉公しているときに起きるできごとを描いた噺。「崇徳院」「恪気の独楽」など
与太郎噺	一寸変わったまたは間抜けな男が舞台回しをする噺。「道具屋」「ろくろ首」など
子供噺	文字通り子供は主人公の噺。これには、親孝行で純真な子供の噺(「やぶ入り」「子別れ」など)と大人をやり込めるこまっしやくれた子供の噺(「初天神」「雛鰯」など)の2種類ある。
大名・武家噺	庶民が大名・武家をからかいやっつける噺。「だがや」「首提灯」など
旅 噺	旅の悲喜こもごもを描いた噺。「大山詣り」「宿屋のあだ討ち」など
酒 噺	飲む行為、酔った状態およびそれから派生する問題等を描いた噺。「居酒屋」「らくだ」など

### (3) おち(さげ)のいろいろ

逆さおち	物事の立場が入れ替わるおち「桃太郎」など
仕草おち	言葉でなく仕草(動作)でおとすもの「狸さい」「剪馥問答」など
考えおち	一瞬考えてから、にやりとさせるおち
地口おち	ダジャレ、語呂合わせなどでおとすもの「三方 - 両損」など
仕込みおち	前もって仕込んだ伏線がおちになるもの「山崎屋」など
途端おち	最後の一言で結末をつけるもの「百年目」など
とんとんおち	梯子のように上げてからおとすもの「一目上がり」など
ぶつつけおち	相手の言う意味の取り違いがおちになるもの「百川」など

間抜けおち 間抜けな馬鹿馬鹿しい言葉でおとすもの「粗忽長屋」など  
回りおち 回り回って元に戻るおち「回り猫」など  
見立ておち 意表をつく物にみたてておとすもの「首提灯」など

#### (4) その他

##### イ、寄席のはじまり

寛政10年(1798年)下谷稲荷神社で落し噺が得意であった櫛職人の京屋又五郎(山生亭花楽後の三笑亭可楽)がひとびとを集めて金をとって噺を聞かせたのが寄席の始まりとして、平成10年(1998年)江戸の寄席興行が始まって200年になるのを記念して台東区東上野の下谷神社境内に「寄席発祥の地」の記念碑が建立された。

ただ、それ以前にも軍談(現在の講談)や義太夫の席があったと思われるほか、落語についても寛政3年(1791年)岡本万作が大阪から江戸へ出てきてカゴ屋の2階で落語の会を行ったという話もあり、どれをもって寄席の嚆矢とするかは定かでない。

いずれにしても、ある程度の期間、場所を決めて、代金をとって落語を聞かせる、いわゆる寄席が成立したのは寛政年間の中ごろであったことは間違いなさそうです。

江戸の寄席の数は、時の幕府の取り締まりにより激減した時期がありますが、文化・文政(1804~1830年)年間にはおよそ120軒、安政2年(1855年)には172軒(落語寄席のみ)、明治12年(1879年)には171軒を擁していた。その後、関東大震災、太平洋戦争、ホール落語の台頭、ラジオ・テレビの発達などにより急激に減少して、現在では落語の定席は「上野鈴本」「新宿末広亭」「浅草演芸ホール」「池袋演芸場」の4軒(「東京の寄席」の項参照)となってしまった。

##### ロ、寄席の1日

寄席に入るのも他の劇場などと同様切符売り場で切符を買い、入り口で半券を切ってもらって入場します。ただ、寄席では切符売り場を「テケツ」、半券を切るところを「モギリ」と特殊な呼び方をしています。また、寄席には前売り券が無いのも特徴です。

寄席の1日は太鼓で始まります。開場時間になると「一番太鼓」が鳴り響きます。これはお客さんにどんどん入ってくださいという意味を込めて「どんどん・どんとこい」というリズムでたたかれます。

開演5分前には「お多福来い来い」という拍子の「二番太鼓」が打たれます。笛を吹ける者がいれば「能管」という笛も合わせて演奏されます。

これで開演となりますが、寄席はプログラムに載っている時間より若干早く始まります。これは、正式なプログラムに含まれていない前座が時間前に噺をするからです。この前座の話を「開口一番」と呼んでいます。

いよいよ開演です。まず、演者が顔を見せる前に音楽がなります。これを「出囃子」と言って1人ずつ独自の曲をもっております。演者が高座に座って頭を下げたところで出囃子は終わります。

寄席で芸人が芸を演ずる場所を「高座」といいます。これは、お坊さんが説教するために座った一段高い席を高座と言っていました。この言葉が落語の寄席でも用いられるようになったと言われています。

1人が演じ終わりますと、前座が出てきて「座布団」をひっくり返して、舞台にある演者の名前を書いた名札を変えます。この演者の名前を書いたものを「めくり」と言い、この2つの作業を併せて「高座返し」と言います。

高座返しが終わっても前座が舞台の端に座ったままのことがあります。これは、大勢の人が入ってきたり、客席がざわついているのが静まるのを待って次の演者がやりやすい雰囲気を作る所作です。

今では余り行われていませんが、羽織にまつわる約束事があります。演者がぬいだ羽織を前座が舞台の袖に片付けたときは次の演者の準備が整っていることを示し、そのままになっていれば噺を引き伸ばしてほしいという合図だったそうです。

楽屋には、ここ数日間の出演者が何を演じたか記入してある「根（ね）多帳（だちょう）」があります。出演者はそれを見て同じ傾向の噺が続かないよう配慮して演目を決めます。

寄席は大体4～5時間連続して演じられているのが普通ですので途中で休憩が入ります。これを「中入り」と言い、太鼓の音と一緒に前座が「おなか～い～り～」と大きな声を張り上げるのが印象的です。

寄席は通常開演中の飲み食いはOKです。しかし、音のしないものを選ぶとか食事はできるだけ中入りの時を利用するとかの心配りが必要でしょう。

また、長丁場ですので途中でトイレに行きたくることがありますが、この場合高座の切れ目に立つのが客のエチケットです。演者にとって客が入ってくるのはいいが、出て行かれるのはいやなものです。

「中入り」が終わると寄席もクライマックスに向かって進んでいき、いよいよ「トリ」の出番です。トリは「中の舞」というトリだけに許された出囃子を使うことができますが、それを使う人もおりますし自分の出囃子を使う人もおります。

トリの高座が終わるとトリと前座の「ありがとうございました」という掛け声とともに「どろどろどろん」という「追い出し太鼓」がたたかれます。これは聞きようによっては「出てけ、出てけ」と聞こえますから不思議です。

この間、寄席進行中における前座の活躍を見逃してはいけません。すなわち、メクリ・お茶などの準備、太鼓たたき、高座返し、根多帳付け、出演者へのお茶だし、着物畳み、出囃子の鳴り物担当などと息つく暇ありません。なかでも、「立前座」と呼ばれる古参の前座は、ギリギリに飛び込んでくる芸人への対処、前の高座の時間を延ばしたり、間に合わなかった場合の出番の入れ替えなどいわば舞台監督のような役割を担っています。言い換えれば、寄席興行は前座でもっていると言っても過言ではありません。

## ハ、寄席の構成

「寄席」は人を寄せる席・場が語源を言われています。いつ行っても落語をやっている所を「寄席定席」（狭い意味の寄席）と言い、寄席の経営者のことを「席亭」と言います。

寄席は1ヶ月を1～10日（「上席」）、11～20日（「中席」）、21～30日（「下席」）、それぞれ昼夜に分けて行われています。各席とも原則として同じ芸人が出演する決まりとなっています。正月はとくに上席を「初席」、中席を「二の替り」と呼んでいます。例えば7月の中席を「七（しち）中（なか）」などと呼ぶのはかなりの通です。また、大の月の31日は「余（よ）一会（いちかい）」と称して特別なプログラムを組んで上演しています。

出演する順番は、前座→二つ目→真打ち→トリというのが原則です。また、

落語ばかり続くと客が疲れるので、通常①落語、②落語、③色物、④落語、⑤落語、⑥色物、⑦落語、⑧落語(「中入り前」)、⑨中入り、⑩落語(「くいつき」)、⑨色物、⑩落語、⑩落語(「ひざ前」)、⑩色物(「ひざ変り」)、⑥落語(「トリ」)などという構成になっているのが一般的です。

寄席は出演者がそれぞれ得意な芸を披露すればよいという訳ではなく、各人にそれぞれ役割があります。すなわち、「中入り前」は比較的明るくて後半に繋がる噺、「くいつき」はトリまで繋げられるような迫力のある噺(若手の有望株などが演ずることが多い)、「ひざ前」はベテランの落ち着いた噺、「ひざ変り」は明るいものだが目立たない芸が求められています。トリは時間を長くかけてじっくり噺を聞かせて場を盛り上げて終わらせるという役割を担っています。つまり、寄席は出演者全員の共同作業で「空気」を読みながら演ずることが求められているのです。

プログラムに出てくる「色物」とは、音曲、手踊り、手品、曲芸、曲独楽、大神楽、声色、漫才・漫談など落語以外の芸能を言います。

名前の由来は、本来の芸(落語)に対し彩りになる芸を指すとか、落語と区別するために「出番表」に赤い字で書いたからとか言われています。

以上